

MESSAGE

学長挨拶

学 長：

寺嶋 一彦



出身地：京都府京都市

専門分野：システム制御工学、ロボット工学

略 歴：1982年京都大学大学院博士課程修了。工学博士

1994年4月 豊橋技術科学大学 教授

2012年4月 同 副学長（～2018年3月）

2018年4月 同 理事・副学長（～2020年3月）

2020年4月 同 学長

集めて、
繋いで、
光をあてる
寺嶋 一彦

▶ 2021年度を振り返って

2021年度もコロナ禍は収束せず、大変な1年でありました。学生は対面での授業や課外活動が制約され、教職員は国内外の出張がほとんどできず、大変ストレスのたまる1年でした。それにもかかわらず、学生は単位取得、卒業・修了研究を立派にやり遂げ、また、教職員はオンライン講義などのDXへの対応により、教育・研究の水準を下げないように努力してくれました。加えて、コロナ禍を踏まえた業務見直しなどにより、講義や会議の効率化が図られた、論文執筆が増えた、多様なジャンルの本や文献に触れることができたなど、マイナス面だけでなく、プラス面に関する声が学内から聞かれました。

2021年度は、まさにレジリエンスを発揮した年といえます。レジリエンス(resilience)とは、「回復力」「弾性(しなやかさ)」を意味する英語です。「レジリエントな」と形容される人物は、困難な問題、危機的な状況、ストレスといった要素に遭遇しても、すぐに立ち直ることができます。また、中国に「人間万事塞翁が馬」という故事成語があります。人生における幸不幸は予測しがたく、幸せが不幸に、不幸が幸せにいつ転じるかわからないのだから、安易に喜んだり悲しんだりするべきではない、という例えです。いい時も悪い時も、一喜一憂せずに物事を考えることが必要であり、言い換えると「チャンスの後にピンチあり、ピンチの後にチャンスあり」とも言えるでしょう。2021年度はまさに、ピンチの後にチャンスが来るように準備をした年であったともいえます。

CONCEPT

ウィズコロナの時代

ピンチをチャンスに変える

▶ 今後目指すところ

- 今後6年間の第4期中期目標・中期計画及び10年先を見据えて新たに策定した将来ビジョンに基づき、大学経営・運営に取り組みます。
- Society5.0の基礎となる、センサ、AI、ロボットなどのCPS(サイバーフィジカルシステム)技術や、SDGs実現のためのカーボンニュートラル技術と、その他の専門分野との異分野融合型の技術科学(クロステック)により、世界最高水準の教育・研究を行っていきます。
- デジタル教育、グリーンテクノロジーなどのSDGs教育、アントレプレナー教育をカリキュラムに組み込んだ教育改革を推進します。
- 本学の国際戦略に基づき、留学生数の増加、日本人学生の海外渡航者数の増加、海外共同研究数の増加など、人的交流の活性化を図り、グローバル化を推進します。
- 高専生をはじめ、高校生、社会人、留学生など、多様なバックグラウンドを有する全ての学生が生き生きと生活できる多文化共生キャンパスを構築し、ダイバーシティを推進します。
- 地域連携を推進し、社会人のリカレント教育を支援します。また、地域に貢献し、地域から愛され、世界に発信・貢献する大学を目指します。

▶ 統合報告書の発刊にあたって

学生、保護者、産業界、地域の方々などステークホルダーの皆様には本学の活動状況を公開することにより、地域や社会にオープンな大学として愛着を持っていただくとともに、アドバイスを賜り、本学の発展に活用し、社会に一層の貢献をしていきたいと思っております。